

## 丸くない丸ビルの話

### 丸くない丸ビルの話

私が小さかった頃、「チューオーコーロン」は、我が家でよく耳にすることばだった。それが場所を意味しているのか物を示しているのか、私にはまったく分からなかったけれども、「チューオーコーロン」というのは我が家にとっても身近な何かなのだということだけは、確かに感じとっていた。

ついでに言う「カワデ」というのもそれに類する単語で、こちらの方もよく分からないが、時に単数、時に複数の人を指していることがあった。

何のことはない、中央公論も河出書房も、父（杉森久英）が編集者だった頃の勤め先だったのだが、それが何なのかも知らずに、ただ馴染みぶかいものとして受け止めていたあの頃のことを思うと、無性に懐かしさがこみ上げてくる。この一月の末に父が亡くなってからはなおさらのことだ。

それにしても、父はよくもまあ頻繁に勤め先を変えたものである。いまさら私があきれられるまでもなく、本人が繰り返し言っていたことではあるのだが、しかし家族にとってはなかなか大変なことだった。

といっても、私はそのことを実感として知っているわけではなく、後になって、父や母が語るのを聞いただけの知識にすぎない。それでも、退社前後の人間関係とか新入社の気苦労など、他人ごとながら想像しただけでも頭が痛くなってしまふ。それを思えば、もの書きになってからの彼はずいぶん辛抱強い仕事好きだったというべきかもしれない。ともかく仕事を止めないで私たちを育て上げたのだから。

その「チューオーコーロン」に一度だけ連れて行ってもらったこ

## 丸くない丸ビルの話

とがあった。

といってももちろんこちらから頼んだわけではない。弟が生まれて母が手一杯になったせいだと思うのだが、父が私を出先に連れ歩いたり、暇な時には動物園なんかに来て行ってくれた時期があったのだ。幼稚園に通いはじめるまでのことだから、私が四歳か五歳だった、ほんのわずかな間である。

「チューオーコーロン」に行くことになった時、私の胸にはひそかな期待があったようだ。それが丸ビルの中にあると聞かされたからである。私は丸ビルを丸いビルだと思ったのだ。丸いビルなんてそれまで見たこともなかったから、どんなものが現われるのか、ほんとうに楽しみだった。(当時、中央公論社は丸ビルにあったのだろうか。あるいは、父の親友でその日の訪問先だった篠原敏之<sup>||</sup>俳号・梵<sup>||</sup>さんが出向でもしていたのかもしれない。)

しかし楽しみではあっても、それを口に出しては言わなかったと思う。だいたいその頃の私は、思ったことをあまり口に出さず、黙って一人で納得したり、感じ入ったりしていることが多かった。父と二人で行った動物園で、ニシキヘビの檻の前に立った時もそうだ。

小山のように見事なとぐろを巻いているのを、「ニシキヘビだよ」と父が言う。私は《にしきぶんの太きだから、ニシキヘビってなんだ》と思ったが、それを口には出さなかった。そののち何年も経ってから、二匹ヘビが実は錦ヘビなのだを知ったときの驚きというか感動は、ちよつとことばで言いたい。

だが丸ビルがただの四角い建物だったのには、さすがに私も黙っていられなくて、「ぜんぜん丸くないじゃない」と父に言った。父はこどもを少しもこども扱えない親だったので(ついでに言うと、娘が大人になってからも女であることを認識せず、男にしてはちよつと出来の悪いところがあると密かに思っていたフシがある)、その時もしごくあっさり「ああ、丸ビルっていうのは、丸ノ内ビルのことだからね」と言った。だから私は、ニシキヘビの場合とは違って、丸ビルは丸いビルではないのだと、その場ですぐに知ることができたのである。

丸ビルが丸くなかったのは大いに期待はずれだったが、その日は高層ビルの窓からネオンのともりはじめた夜景を見下ろすことができたし、シノハラさんという父の友人を眺めることもできたし(優

## 丸くない丸ビルの話

しそうなおじさんだったが、それだけ)、それに何より男性二人といっしょに、生まれて初めておでん屋に行くことができたので、私にとっては非常に世界の広がった、忘れがたい一日になった。

そのおでん屋は、まつさらな白木のカウンターの向こうで、たいそう美しい女の人がつこり笑って「何がいいの」と聞いてくれて、こども心に、夜遊びというのも悪くないものだと思った(ような気がする)。

後で聞いたところでは、その店は、何とかいう作家の愛人の、何とかいう元女優が開店したばかりであっただけだが、どちらの名前も私の記憶から消えてしまった。

だがそんな満足にもかかわらず、期待しながら見損なった丸いビルの幻は、その後いつまでも私の脳裏につきまとい離れなかった。そしてたとえば、ラジオやテレビが、その年全国で消費されたビールの総量などについて「丸ビル何杯分」という言い方をすると、私の頭には、円筒形だったり球形だったり、要するに巨大なガスタンクのような丸いものが自然に浮かんできて、「これ、これ!」と思わずほくそ笑んでしまうのだった。

そしてまたそれと裏腹に、丸ビルが丸くないと知ったときの失望もかなり執念深く、あれから五十年近く経った今でもまだ、丸ビルを見るとつい愚痴っぽく「丸くないのにねえ」と思ってしまうのである。

(初出「中央公論」一九九七年六月号)

(日本文芸家協会編「夜となく昼となく」(一九九八年)収録)

# 丸くない丸ビルの話